

第23回 ちゅうでん教育振興助成（2023年度）

小・中学校の部 報告書資料

学校名・団体名	岡崎市立竜谷小学校
コース	学校支援コース
活動・研究のテーマ	持続可能な社会を目指し、主体的に行動する子供の育成 ～ふるさと竜谷の「人・もの・こと」を生かした授業創りを通して～

<活動・研究の意義および活動報告>

(1) 目指す子供像

- ①ふるさと竜谷に愛着をもち、竜谷の自然や文化、伝統などの事象に課題を見つけることができる子供。
- ②自らすすんで追究し、ふるさと竜谷について深く考えることができる子供。
- ③ふるさと竜谷の現在や将来に想いをよせ、持続可能な社会の実現に向け、主体的に行動できる子供

(2) 仮説と手だて

<仮説1>

ふるさと学習の始まりに、地域学習を軸とした体験活動の位置づけや教材との出合わせを工夫すれば、竜谷の自然や文化、伝統などの事象に目を向け、ふるさと竜谷に愛着をもち、それらの事象に課題を見つけるだろう。

手だて1 ・学校や学区など、身近な環境の調査活動から始まる授業づくり

手だて2 ・SDGsの視点を取り入れた課題づくりなどの教材の工夫

<仮説2>

ふるさと学習の追究過程で、子供の思いを生かしたチーム学習の工夫や自分の気づきや考えを整理する振り返り活動をすれば、自らすすんで追究し、ふるさと竜谷について深く考えることができるだろう。

手だて3 ・互いに伝え合ったり、教え合ったりする情報交換の場の位置づけ

手だて4 ・振り返りの場の保障とその工夫（子供たちの実態や発達段階に合った振り返り）

<仮説3>

ふるさと学習の追究過程や単元の終わりに、地域社会で活躍する講師を活用し、学んだことを発信したり、表現したりする活動の工夫をすれば、子供たちはふるさと竜谷の現在や将来に思いや願いをよせ、持続可能な社会の実現に向け、主体的に行動できるだろう。

手だて5 ・地域で活躍、環境保全のために活動している地域ボランティアや専門的な知識をもつ講師の活用

手だて6 ・ふるさと学習のまとめを発表する場の保障、地域社会への発信活動や行動化の工夫

(3) 活動報告（1・2年は「生活科」のため、ふるさと学習として関連できる内容を報告）

①1年「みんなとなかよし」

本校は、平成10年度全日本学校環境緑化コンクールにおいて文部科学大臣賞を受賞するなど、至る所に実のなる木が植えられており、多くの昆虫、野鳥が観察できる。また、生活科では具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を育て、自立し生活を豊かにしていくが大切である。そこで、トヨタの森のインタープリターの川田奈穂子氏を講師として招聘し、植物の観察や自然遊びを行った。（資料①）また、昔遊びの達人として学区のお年寄りをお招きし、こま回しやけん玉、お手玉遊びなどを行った。1年を通し、学区の様々な方と交流し、なかよしになれたお礼に、学習に関わってくださった方々をお呼びし、歌を披露したり、手紙を渡したりして感謝の気持ちを伝えた。「ふるさと学習」を通して、子供たちは学校や学区の方々が好きで、大切にしたいという気持ちの素地ができた。

②2年「竜谷となかよし」

町探検を通して、学区の様々な人、もの、ことにふれた。学区でブルーベリーファームを運営されている畔柳さんからは、竜谷の土地の素晴らしさを知り、農業に適した町であることを知った。自然環境の素晴らしさ、さらに親切に様々なことを教えてくださる学区の方の温かさにもふれ、郷土への愛着をさらに深めた。



資料①：1年「植物観察の様子」

③ 3年「米作りの盛んな町 竜谷」

校歌の歌詞に「稲穂の波は輝いて」というフレーズがある。このことから昔から稲作が盛んであったと考えた子供たちは、稲作に興味をもち追究した。農家の方をお呼びし、米作りの方法や苦勞などを聞くことで、体験してみたい、もっと詳しく調べ、学区で採れたお米で料理を作ってみたいと考えた。残念ながら、田植えや稲刈りの時期は逃してしまったが、5年生の社会科で稲作について学ぶ際は、体験したいと主体的に考えるようになった。農家の方から、収穫したお米をいただいたので、保護者と一緒に「五平餅作り」に挑戦し、学区の方とも一緒に食べた。(資料②) お米の大切さについて実感しながら学ぶことで、これからも学区の豊かな環境を守っていききたいと強く願うことができた。また、米作りに大切な水についても興味をもち始め、「水環境」についても追究したいと考えるようになった。



資料②：3年「五平餅作りの様子」

④ 4年「ぼくたち、わたしたちの竜泉寺川」

竜泉寺川には、毎年ホタルが舞うが、少し離れた学校の自然観察池（ビオ竜谷）には、ホタルは来ない。なぜホタルは学校に来ないのか、1学期、実際に竜泉寺川の生物と水質を調査した。(グループ活動で、班ごとにデジタルカメラを使い、採取した生物の記録し、学校で同定。足元が危険で遠い場所はUSBスコープを活用。) 調査結果から、竜泉寺川の水質はきれいでホタルが息をするのに適した環境であることが分かった。さらに2学期には、昔の竜泉寺川の様子に詳しい山本さん、ホタルの保護活動をしている稲吉さんを講師としてお招きし、お話を聞いた。昔はもっときれいな川であったこと、保護活動をされている方々が高齢になり、活動の担い手がなくなっている現状を知った。3学期、竜泉寺川を守りたいと願うようになった子供たちは、自分たちに何ができるかを考え、学区の方々に発表した。また、同じく学区の川を追究している生平小と交流会（ビデオカメラや接続ケーブル、変換ケーブルなどを使用）をすることで、自分たちの地域だけでなく、広い範囲で持続可能な社会を実現したいと考えることができた。(資料③)



資料③：4年「交流会の様子」

⑤ 5年「竜谷学区は大丈夫！？ ～防災から考える～」

6月の記録的な豪雨の影響で、竜泉寺川も氾濫し、浸水の被害を受けた家があった。学区で災害が起こった場合、学校が避難所になることを知った子供たちは、防災や減災についてももっと詳しく知り、どのような準備をしなければならないのか深く追究するようになった。ボランティアの方を講師として招き、実際に体育館で避難所を設営（避難所用シートを使用）し、防災グッズ（防災器具の一つとして使用）として必要なものについて学んだ。さらに自分事として捉え、学区の一員として活動しなければならないことも自覚し始めた。3学期、学んだことを発表したり、防災に関する資料を自作したりすることで、広く知らせる活動ができた。(ビデオカメラやデジタルカメラなどを使用) (資料④)



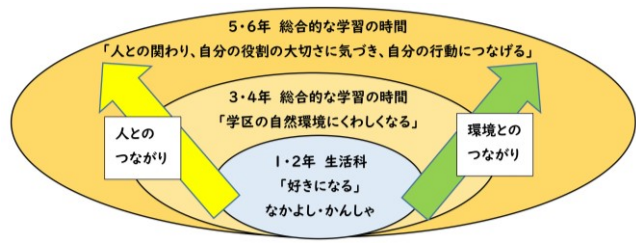
資料④：5年「発表の様子」

⑥ 6年「みんなの住みやすい町 竜谷」

自分たちは不自由なく生活できている学区だが、「みんなにとって本当に住みやすい町か」を考えた。そこで、1、2学期は、隣接している保育園や介護施設へ訪問し、実際の様子を観察し、職員の方を中心に聞き取り調査をした。また、体の不自由な方の生活について理解を深めるため、ボランティアの方をお招きし、講義と体験実習を行った。その後、様々な立場の人の目線で学区調査を行った。今まで、自分たちでは不自由ないと思っていた道路なども、危険箇所や改善した方がよい場所などを見つけ、多くの子供たちが驚いた。3学期は、これらの調査結果と話し合いをもとに考えた改善案、そして大好きな竜谷学区がどのようになってほしいか、自分たちの願いを保護者へ発表した。また、現在住みやすい町が維持されているのは、様々な面で自分たちを支えてくださっている地域の方々のおかげであることに気づき、感謝の気持ちを手紙で伝えたり、歌で表現したりした（感謝の心を伝える歌唱指導）。これらの活動を通して、学区への愛着はさらに深くなった。

(4) 研究の成果と課題 (○：成果、●：課題)

- 手だて1、2については、全学年が校内の身近な環境から始め、徐々に学区へと向けたため、スムーズに追究が広がり、意欲も最後まで高く維持された。また、関わる人も学校や家族など身近な存在から、学区の方々、他の学校や地域へと広がった。
- 手だて3、4については、チーム学習、振り返りは、普段の授業が大切にしたいと全職員が考え、積極的に授業で取り入れた。授業力、教師力の向上にもつながった。
- 手だて5、6については、専門的な知識を有する講師の招聘、地域の歴史や現状に詳しい地域ボランティアの協力のおかげで学びの広がりや深まりが見られた。
- 竜谷学区には、子供たちが意欲的に取り組む教材にできそうな事象がたくさんある。来年度、地域の事象一つでも多く教材化したい。
- 本年度の実践から、系統図を作成した(資料⑤)。年間指導計画も作成したので、来年度検証していきたい。



資料⑤：竜谷小学校「ふるさと学習」イメージ系統図